<table>
<tr><td colspan="6">会　　議　　録</td></tr>
<tr><td colspan="2">令和５年度第１回
生活支援事業協議体</td><td>日
時</td><td>令和５年５月２４日（水）
１４時００分～１６時００分</td><td>場
所</td><td>小金井市市民会館
３階　萌え木ホール
Ｂ会議室</td></tr>
<tr><td>事務局</td><td colspan="5">小金井市福祉保健部介護福祉課</td></tr>
<tr><td rowspan="2">出
席
者</td><td>委　員</td><td colspan="4">高良委員長（法政大学）
石塚委員（社会福祉協議会）
出川委員（介護事業者連絡会）
鈴木委員（民生委員児童委員協議会）
濱名委員（地域貢献活動をする者）
村越委員（町会・自治会）
第２層コーディネーター
　松村氏（小金井きた地域包括支援センター）
　金子氏（小金井ひがし地域包括支援センター）
　吉田氏（小金井みなみ地域包括支援センター）
　久野氏（小金井にし地域包括支援センター）</td></tr>
<tr><td>事務局</td><td colspan="4">第１層コーディネーター
　菊地原氏（小金井市介護福祉課）
大澤、平岡、濱松、木津（介護福祉課）</td></tr>
<tr><td colspan="2">傍聴の可否</td><td colspan="2">◎可　・　一部不可　・　不可</td><td>傍聴者数</td><td>０人</td></tr>
<tr><td colspan="3">傍聴不可・一部不可の場合の理由</td><td colspan="3"></td></tr>
</table>

次　　第

１　開会
２　議題
（１）委員自己紹介
（２）委員長・副委員長の選出
（３）報告事項
①　前回協議体からの進捗等
②　東京ホームタウンプロジェクトの完了報告と今後の活動について
③　令和４年度１２月から３月分生活支援連絡会報告
④　生活支援コーディネーター活動報告（１２月分～３月分）
⑤　令和４年度各地域包括支援センター活動報告
⑥　令和５年度各地域包括支援センター活動目標
（４）検討事項
　高齢男性のニーズ調査を踏まえた生活意識へのアプローチについて
３　その他
　福祉保健部長からの挨拶
　次回協議体の開催予定
４　閉会

１　開会
　協議体の開催にあたり資料の確認と、会議録作成にあたり全文を記録するものの、会議録の公表に当たっては、市民への分かりやすさを考慮し、発言者の発言内

容ごとの要点記録とすることを説明した。

２　議題

⑴　委員自己紹介

委員自己紹介及び事務局出席者紹介

⑵　委員長・副委員長の選出

指名推薦により全会一致で髙良委員を委員長に、石塚委員を副委員長に選出

⑶　報告事項

①　前回協議体からの進捗等

（事務局）

昨年度の活動実績と今年度の活動予定について報告。

昨年度の活動実績の中でスマホサポーター養成講座と相談会の２点を報告。

スマホを学びたいニーズに対して、対応できる資源が不足している課題があり、昨年度２月にスマホサポーター養成講座を開催。２０名の申込みがあり、そのうち１７名が講座を修了。今後の活動として市で開催するスマホ講座のサポートや、相談会等での相談員を担ってもらいたいと考える。また地域からスマホの出張相談会の要望もあり、スマホサポーターのニーズはますます高まる。また、スマホサポーターが活動するにはまだ不安があるため、スマホサポーターとして継続して学び続ける場が必要と感じており、市は養成講座終了後もスマホサポーターの勉強会や活動の場の提供を行っていきたい。

次にスマホ相談会について、昨年度東京都の事業を活用し、随時相談会のほか、秋からは定期相談会として毎週火曜日の午後同じ場所と時間で相談会を実施。相談実績は、随時相談会を計８回行い１１８名の参加があり、定期相談会は１８回開催し１３３名の参加があった。

（高良委員長）

スマホに関して継続して活動し、高齢者の知識が増えたのではないかという気がする。スマホサポーターはスマホだけではなく、いろいろな活動の鍵になると思い、とてもすばらしい活動だと思う。

地域ケア会議の欄にスペースがあるが何も実施してなかったということか。

（事務局）

昨年度の実施はない。

（高良委員長）

いろいろな課題が出てきているので、何らかの形で対応する必要性も出てきている。市として課題をより明確にし、政策決定等の必要性がある場合には地域ケア会議の実施も含めて考える必要があると思われる。

②　東京ホームタウンプロジェクトの完了報告と今後の活動について

（事務局）

昨年度東京ホームタウンプロジェクト課題解決力共有化プログラムにエントリーし採択された。プロジェクトではお金の管理に関する啓発パンフレットの作成支援とプロボノワーカーによるマーケティング実施計画策定を行い、その成果物が啓発用のパ

ンフレットになる。現在、パンフレットの印刷依頼をしているので、本日はお配りできないが次回の協議体ではお渡しできると思う。
　また、もう一つの成果物として、資料２のカスタマージャーニーを配布して説明。
　カスタマージャーニーマップとは、ターゲットが目的地に向かうまでに通った『道順』を示したもので、お金の管理について知らない状態からお金の管理について準備するまでに小金井市民が取る動きを、道順を表形式のマップとして落とし込んだものと思っていただきたい。それぞれのフェーズで小金井市民の状態や、そこで目指す施策や活動を縦軸に記してある。
　「ターゲット：７５歳、一人暮らし、健康な人」を例にあげて、アプローチをどうしていくのかを説明。昨年度の第３回目のワークショップでは、カスタマージャーニーの施策の【認知】・【興味・関心】・【行動】について地域住民の方々と一緒に考え話し合った。結果については追加資料２となる。
　今後はこちらを基に今年度の啓発活動を実施する予定。
　昨年度、ワークショップで出た意見を踏まえてお隣さんカフェにて朗読劇という形で啓発活動を行った。大変好評で啓発活動を実施した生活支援コーディネーターもすごく手ごたえを感じた。今年度はその経験を生かして朗読劇という手法を使いながら各圏域の公民館や１１月のお元気サミットなどで啓発活動を実施していきたい。第１回目は公民館南分館で７月２８日金曜日午後２時から実施予定。吉田委員が脚本を作成し、地域住民の参加者も交えながら伝えしていきたい。
　啓発チラシの配付について、対象者がどのように手にするかが重要になるので、民生委員の７５歳・８０歳訪問のときに一緒に配付したいと考えている。ぜひ鈴木委員にも御協力願いたい。
　またこのたび、お金の管理の啓発について市の学び合い出前講座に新規登録した。
以上、東京ホームタウンプロジェクト完了報告とする。
（高良委員長）
　お金の管理に関するお困りごとについてこのような形で具体的に、地域住民の方々と共に考えていけたのは価値があったと思われる。実際に関わることで地域住民の方々の意識が変わるとともに、どんどん広がる機会になると思われる。
（吉田委員）
　啓発活動では楽しくできればなと思う。
（高良委員長）
　皆様、何か質問等はないか、あったらお願いしたい。
　よろしいか。
（石塚副委員長）
　私の担当部署は福祉総合相談窓口だが、権利擁護センターという部署も担当している。権利擁護センターの中でお金の問題は非常に大きいことで、今、金融機関もどんどん支店が閉鎖や統合されている。ちょうど東町の区域だと１件銀行が閉店になってしまい、ＡＴＭもないのでそこの近隣にある武蔵野中央病院に入院されている方は結構そこの銀行を利用していたため、他の金融機関へ切り替えるかどうするかで悩んでいらっしゃる話も伺っている。
　また、権利擁護事業の中でキャッシュレスに対応する大きな課題もあり、お金の問題は時代が進んでいくだけ新たなステージが出てくると思われる。
（高良委員長）
　お金に関するお困りごとについて、今後は啓発活動を続ける中でまた新たな課題が

見えてくると思う。その新たな課題についてはこの協議体で検討しながら進めていきたい。
　また今回のホームタウンプロジェクトの活動で得られた経験はいろいろ活用できる知見が多くあると考える、それらを活用しながら話合いに生かしていきたい。

（大澤福祉保健部長）
　福祉保健部長からの挨拶。

　　③　令和４年度１２月から３月分生活支援連絡会報告
（事務局）
　第１層及び第２層コーディネーターと市の打合せ内容の会議録となっている。
　詳細については資料３を御覧いただきたい。
（高良委員長）
　連絡会について質問等があったらお願いしたい。
　委員の方で何か補足があったらお願いしたい。
　よろしいか。
　連絡会については重要な役割を担っていると感じる。協議体が年に３回しかないので、協議体では課題を明確にして方向性を検討するが、実際の行動に移すことができない。連絡会で継続してこの話合いをしていく事でニーズ調査についても実際実施できた。今後の話合いに資する重要なデータを取っていただいたことになったと思う。今後もこのような形で連絡会を継続していっていただきたい。

　　④　生活支援コーディネーター活動報告（１２月分～３月分）
（事務局）
　活動報告の内容は毎月行う連絡会でどのような対応を行っているかなどの情報共有を行っている。詳細については資料４を御覧いただきたい。
（高良委員長）
　何か質問等があったらお願いしたい。
　これだけの活動を確認するのは大変だと思うが、逆に活動している生活支援コーディネーターの各委員から、これだけは共有しておきたいことがあれば発言いただきたいがいかがか。
　では、後ほど地域包括支援センターの活動報告もあるので、もし関連してお話しいただけることがあればお願いしたい。

　　⑤　令和４年度各地域包括支援センター活動報告
　　⑥　令和５年度各地域包括支援センター活動目標
（事務局）
　各圏域の生活支援コーディネーターが毎年年度当初に設定する地域課題と考えられる課題に対して活動目標や活動手段を決め、その活動した達成状況を活動目標の達成状況として記載している。詳細については資料５を御覧いただきたい。また各圏域の令和５年度小金井市地域課題対応活動計画・評価シートの活動目標については各地域包括支援センターの第２層コーディネーターより御説明させていただく。
（松村委員）
　コロナの５類への移行に伴い、きた圏域では毎月開催している２層協議体や、地域

の協議体主催によるイベントの開催が増える予定。まず２層協議体である梶野町ないまぜの会では、梶野公園まつりに加えて２つのイベントに参加する。１つは梶野町町会主催の４年ぶりの盆踊りと、長昌寺で開催する道草市である。
　けやき通り商店会・観光まちおこし協会・本町２丁目住民を中心に開催しているみんなのささえ愛ネットワークという協議体でも、１１月に都民農園において多世代交流のイベントを予定している。
　包括主催の認知症カフェについては、これまでの感染対策を最優先とした「ミニ講座と介護予防体操」という構成から、レクリエーションを中心に、参加者同士がリラックスした雰囲気でおしゃべりを楽しめるような内容への方向転換を進めている。
　一方で、「包括主催の講座なら安心して参加できる」という声に応えるため、今年度から新たに「きた包括暮らし講座」というタイトルで、シニアの暮らしに関わるさまざまなテーマを扱う講座を、認知症カフェ同様、土曜日の午後の時間帯に不定期で実施していく。こちらはシニアだけでなく現役世代の方にも気軽に参加してもらい、包括とつながっていただくことを目指している。初回は財務コンサルタントに教わる遺言書作成という内容で、７月末に開催する。
　今年度はサロンの運営支援にも力を入れる予定。今年３月末にピアサロンが市内全域で活動終了となったが、きた圏域の参加者から継続支援の依頼があった。４月５月と２回にわたり継続支援のために２層協議体を開催したところ、参加者から新たな代表が出たことに加え、近くの薬局が運営のサポートを申し出てくれたことにより、継続の見通しが立った。さらに今年度はサロンリーダー連絡会を開催し、サロン主催者の横の連携を促す支援を考えている。
（高良委員長）
　何か質問等があったらお願いしたい。よろしいか。
　鈴木委員は担当地区が西部地区となっているが何圏域になるのか。
（鈴木委員）
　みなみ圏域になる。
（高良委員長）
　濱名委員は。
（濱名委員）
　ひがし圏域になる。
（高良委員長）
　村越委員は。
（村越委員）
　ひがし圏域になる。
（高良委員長）
　全体を通して質問等があったらお願いしたい。
　全ての活動が素晴らしいと思う。コロナの感染状況が５類に変わっても感染対策をしながらにはなると思うが、これまでできなかったことがどんどんできる年になると思われる。そういった意味でどんどんとやっていくのはすばらしいことだと思うし、今回挙げていただいた多世代での形のキーワードのもと、活動していくことは今後ますます必要になってくると思う。
（吉田委員）
　みなみ圏域の１つ目は金銭管理に関する困りごとについて、４圏域での啓発活動の皮切りに先ほどもお話にあった７月２８日金曜日公民館貫井南分館にて朗読劇による

啓発活動を実施予定。朗読劇では小金井の地域性やちょっとした歴史の話も織り込んで、楽しく課題共有できる工夫をしていきたい。また、開催に当たっては地元の老人クラブ貫井会西と貫井会東との共催を計画しており、地縁組織との連携で多くの方たちと課題共有ができるものと考えている。

２つ目は男性の社会参加については、課題抽出のアンケートにとどまらず、２層協議体として昨年度から定期開催しているサロン連絡会や貫井住宅自治会との懇談の場等で具体的な実態把握と共有を進めていく予定。

その他の活動として資料５の課題分析・評価シートにある活動目標、手段などについても１層協議体での検討課題を意識して進めていく予定。

（高良委員長）

何か質問等はあるか。

（鈴木委員）

７月２８日の貫井南センターでの啓発活動では老人クラブ貫井会西と貫井会東を中心に行うとの事だが、一般の方が朗読劇の啓発活動を観覧することは出来るのか、何人まで入れるのかなど、人数制限があるのか。

（吉田委員）

市と老人会との共催で実施する予定なので、一般の方も入っていただけるように貫井会と相談していく方向で考えている。

（高良委員長）

どういう方が入れるかの情報を明確に伝えてほしい。

（吉田委員）

朗読劇は市や包括の生活支援コーディネーターだけではなく、啓発パンフレット検討会に参加してくれた市民の方々にも参加していただく予定。またその方々がそれぞれ顔の広い人なので、その方々のお知り合いが多く来ることが見込まれるため、そのことも含めて部屋の確保が必要だと考えている。

あわせて周知する側としては多くの方に見ていただきたい、聞いていただきたいと考えているので、実際の当事者組織である老人クラブの方たちにアクセスすることで、より多くの方にお伝えできると考えている。

（高良委員長）

地域のインフルエンサーの方が主になって、我々はキーパーソンという言い方をするが、インフルエンサーの方たちが出てくるといろいろな方達にどんどん広がっていくなどのいい状況になると思われる。

他にはよろしいか。

（石塚副委員長）

みなみ圏域の地域課題にある孤立しがちな高齢者についての考えられる背景として、高齢者等の要因があると思われる。相談できる相手が近隣にいないと言いつつも、実際は支援を拒否するようなところもあり、環境要因で本人は困っていないという方が結構いるためになかなか支援につながらない。事業者サービスをもう少し広げたほうがいいと思われる方や、地域に出ていくことにもつながらない方に対しての支援の方法は今後いろいろ考えていかなくてはいけない。私どもの窓口相談の中でもそういったところは一番難しい案件だと思われる。実はそういった方々が一番支援が必要な方々ということがあるので、今年の課題として少しでも進められる方法があれば一緒に考えて行きたい。

（高良委員長）

できる限り早め早めに支援につながっていくことがとても重要ではないかと思う。また後ほど検討していきたい。
（金子委員）
令和５年度ひがし圏域の地域課題は、１つ目に情報が行き届いていない、２つ目に生活に係るちょっとした困りごとがある、３番目に誰もが気軽に立ち寄れる居場所がないという３点を挙げた。
具体的な取組計画は、継続した取組の情報誌、またＬＩＮＥによる情報発信も開始したので、地域活動の情報発信を続けていく。また活動団体への訪問、連絡による関係性の継続、新規居場所の立ち上げ支援を行っていきたい。
２層協議体の開催や、引き続き総合相談からも地域課題、傾向の抽出を図っていく。
お金の管理については先ほどの報告でもあったが、第１層・２層コーディネーターと地域住民の方も交えて連携しながら、我ごととして行動に移していけるような朗読劇を通して啓発活動を行っていきたい。
また今年度４月５月に新規団体の立ち上げ支援を行ってきたが、助成事業申請をしたところ、今年度の対応が難しいという回答があった。既に２層協議体で検討し始めていたので、再度検討が必要となっている。今後も同様の状況が見込まれることや、過去の第１層協議体でも助成事業についてはこのような報告があったので、今後の資源開発や地域活動を推進する上での活動団体への助成事業の新設や、当法人においても地域公益事業として何か支援が行える体制整備の検討ができないかを考えている。
（高良委員長）
何か質問等はあるか。
先ほどの話にあった助成事業の対象にならなかったというのはどういう理由か。
（金子委員）
予算がもう組めないというお返事だった。
（高良委員長）
助成事業自体はあるが、もう年度の予算がないということか
これについては小金井市の助成事業なのか。
（石塚副委員長）
今の話の助成事業は社会福祉協議会で行っているふれあいいきいきサロンの助成金というもので、今年度予算を恐らく６０万円で組んでおり、１００万を超える申請があったと聞いている。私は直接の担当ではないが、申請が出た段階で内部で何とかできないのかと検討した上での結果だとのことだ。ただ、残念ながら恐らく申請した団体も満額はもらえないような状態で実施されると考える。
財源が歳末助け合い募金や、浄財から工面しているので、募金額がコロナの影響でガタ減りになっていて、なかなか助成事業として回すことが難しくなっている。あと社会福祉協議会ではさくらファンドという市民活動団体向けのファンドもあるが、そちらも恐らく同じように財源が厳しい状況であると考えられる。
いずれにしても、今後活動を広げていく上で資金や、場所の確保の問題は非常に大きいと思う。なかなか解決が難しいところだが、皆さんと考えながら進めて行けたらと思う。
（高良委員長）
市民の方々の活動を促進していただきたい状況の中では、できる限り助成事業の環境整備をしていかなければいけないと思う。もちろん社協だけにお願いすることでは

なく、社会福祉法で社会福祉法人の社会貢献ということも言われており、社会福祉法人で何らかの助成を考えてもらったり、社会福祉法人だけではなく一般の民間の企業であったり、資金までは難しいが場所だけでも貸してもらえないかなどの協力をいただくなどの可能性を含めて、今ある資源をどう開拓していきながら市民の方々が活用できる状況を検討していかなければいけないと考える。

これについては協議体でも検討するとともに、状況によっては公的な力も要ると考えられるので、小金井市とともにどういう形をとるのがいいのかを検討できればと思う。一応課題認識として今回記録していただき、また連絡会でも継続して話合いをしていただきたい。

（久野委員）

にし圏域の令和４年度では社協の地域福祉コーディネーターと協同して本町住宅のサロンの立ち上げ支援を行ったことが大きな活動だったと感じる。

それを踏まえて、令和５年度の活動目標を５点挙げる。

１つ目がウィズコロナの時代でも人とのつながりを絶やさない。積極的に活動を再開した人とそうでない人の二極化がすごく進んでいる印象を受けるので、足踏みしている方に対して孤立されないようにアプローチして、また以前のように安心して活動できるような働きかけを考えている。

２つ目の地域情報の提供では、いままでも応援マップやいろいろなものを配付したり、個別相談等の際には情報提供を行ってきたが、このたびＬＩＮＥ公式アカウントを取得したので包括のチラシにＱＲコードを載せて個別訪問の際やいろいろな団体に配っている。ＬＩＮＥのお友達登録を増やして、いろいろな情報を発信していきたい。

３番目は多様な社会参加の場（居場所等）となり得る資源を探す。令和４年度に立ち上げた本町住宅のサロンの活動では毎回１０人前後の高齢者の方が来て、ご意見をいただいて色々なことをやってみたが、なかなか活動の内容によっては指導できるような人材がいなかった。最近、近所の保育園から高齢者と園児の交流をさせたいという温かいお声をいただいたので、今年度は異世代交流ができるような活動の場をつくっていきたいと考えている。

４つ目は支援の仕組みを構築できる資源（担い手、団体など）を探したいと考えている。ＬＩＮＥ等を通じて発信して、何かいい担い手の発掘ができればいいと思っているが、それと同時にＬＩＮＥそのものの使い方を理解できる方を少し増やしていくのも必要かなと考えている。

また、自宅から歩いて行ける徒歩圏内で参加できるような場所の創出も考えている。コロナ前は包括事務所の近くに、それこそ学芸大学のコミュニティーサロンがあり使わせてもらっていた。最近はコロナの関係で使えていないので、そういったところの再開発というような形で発掘できればなと考えている。

高齢者になると起こり得ることの啓発活動については、昨年度同様に他の包括と協同・連携して活動していきたい。

（高良委員長）

サロン活動の指導する方の探し方について、自分の得意分野を登録するようなもので、データベース化しておき、誰かにお願いしたいときはそのデータを見て連絡するようなものはないのか。データベース化がされていないのなら、そういうものを構築してはいかがか。個人情報の管理はもちろん本人がよければいいわけなので。

先ほどの講座の話もあるが、いろいろなことを実施するに当たって、できれば市民

の方々の力を活用しながら、それこそ教える立場になったり、今度は一緒に講座を受ける受講者になったりという形を構築していく。市民の方々のそれぞれの得意分野を登録していくのも１つではないかなと思うがいかがか。
（石塚副委員長）
以前にボランティアセンターの担当をしていた際には、ボランティア登録、個人登録、何かできることを登録してもらい、それをマッチングするという仕事だが、一番の問題は情報がどんどん古くなっていくこと。その情報の更新をちゃんと継続的にできるかで、登録はしてもらったもののいつまでたっても話が来ないと、登録した方も意味ないかというような感じになってしまうので、ボランティアする側のモチベーションをうまく仕組みとしてつくれるかが大事だと思う。
登録の形にしてマッチングされるのを待つのか、ボランティアする本人たちがプッシュ型で自分たちから宣伝して掲示板等で依頼を探すのか。いずれにしてもそういう情報がちゃんと更新されていく、ボランティアをやりたい人の気持ちを、モチベーションをどういうふうに維持するかというところが大事だと思う。
（高良委員長）
これだけＬＩＮＥを皆様がいろいろ活用し始め、高齢者の方々もそういうものに対しての意識があり、かつ使える方が増えてきたことを考えると、こういう方はいませんか、お手伝いしてくれませんかというような情報を流してみるとか、もう少しＩＴを活用しながら他の方法もできるのではないかと思う。また追々必要があるようであれば、議題に上げて検討してもいいのではないかなと思う。
それでは、報告事項の全体を通して何か質問等があればお願いしたい。
よろしいか。

⑷検討事項
高齢男性のニーズ調査を踏まえた生活意識へのアプローチについて
（事務局）
前回の協議体で高齢男性の生活意識へのアプローチについて取り組むことになり、高齢男性はどんな活動だったらやりたいのか、どんなところなら外に出ようと思うのか、何を楽しみに感じているのかを調べることとし、ニーズ調査のアンケートを実施した。
内容については、配付資料うち水色の用紙で、中に挟まっているものがアンケートの集計結果となる。
目的としては、以前から女性に比べて男性の地域参加が少ないという課題があり、男性のニーズを把握するために調査を実施。
活動に参加していない人に対してアンケートを実施することが大変難しく、主に高齢男性の活動参加者に対して調査を実施している状況。
調査期間は令和５年３月末から令和５年５月１９日までとしており、調査方法は通いの場等への訪問調査。
配布件数はコピーをして調査している分もあるためにはっきりとした数は把握していないが、５００件は確実に配付しており、実際の回答数が２５８件。仮に配布５００件として、５１．６％という回収率になる。
アンケート問１、どのような地域活動に参加していますかという問いに関しては、趣味活動という項目が８４人と一番多くあった。複数回答のため、ほかの活動をしている人は趣味活動にも参加しているという形で趣味活動がぐっと上がっている傾向も

考えられる。
　アンケート問２、地域情報はどこで知りましたかという質問については、市報からの情報収集が非常に高い、そのほか公民館や集会施設、掲示板、回覧板という昔ながらの紙での情報も非常に強いと見うけられる。
　問３、参加したきっかけについて伺ったところ、興味関心があったという数値が１１３人と多くなっている。これに関しても複数回答可ということで、興味関心があったとチェックをしている方は健康のためとか仲間づくりという回答にもチェックがしてあった。何に興味があるのか、興味・関心をどのように持ってもらうかがキーポイントになると思う。
　問４、参加しづらいと思う理由については、圧倒的に面倒くさい、興味がない、やる気がないが男性らしいなという結果だが、興味・関心があれば動くのだということが問３で見えてきているので、興味・関心のきっかけをいかにつくっていくかが必要になってくると考える。
　問５、男性のための地域活動があったらどのような活動なら参加してみたいですかという質問に対しては、均等にばらけたという印象である。やってみたいと思うことは人それぞれで、参加していない理由についてはその方のやりたいことが色々あるけれども、活動する場所が自宅付近にないとも考えられる。
　問６、年齢については、回答者の６６％以上が７５歳以上で、７０歳以下の参加者が非常に少ない傾向が見られる。その背景として７０歳ぐらいまでは仕事をしている方が多く見られることが考えられる。７０歳～７４歳の間に地域に戻って何かするきっかけや仕組みづくりをしていくことが今後の課題になってくると感じた。
　その他記入内容について列記させていただいたが、問５、どのような活動なら参加してみたいですかのその他の欄にたくさん記載があり、幅広いニーズに応えられるような多様性のある通いの場が必要と感じた。
　（高良委員長）
　このたびのアンケート実施については皆様に御協力いただきありがたいと思う。このアンケート以外にも個別に聞取りをしていると思われるが、何か補足でこういったところがあったなど報告いただきたい。
　がいかがか。
　（吉田委員）
　みなみ包括の圏域にはらくらくサロンとラクビット、それからほかの圏域ともまたぐが、クリスタルという中グループ等で男性の活動が非常に多い活動団体があり、そういったところにお話を伺った。全般的にやはり活動団体にいる方たちはコミュニケーション能力が非常に高く、穏やかと言ったらおかしいが物腰が柔らかい方が多い印象である。外に出ない方はその真逆というわけではないが、個人の生活を好み１人がいいという方たちもいる。実際にケースを幾つか持っており、比較的介護度の低い方にもアンケートのお答えをいただいたが、もともとこもりがちで居る。そういった当事者の方々を比較対象として見ると、生活実態が大分違うことを明らかに感じる。そこのリーチは非常に難しく感じる。また、アンケート結果を見ると参加してみたい地域活動の幅が広くなるので、選択肢を多数設けなければいけない難しさを感じる。
（高良委員長）
　ほかに報告はあるか。あればお願いしたい。
（松村委員）
　きた圏域は男性の参加者が多い団体がいくつかあり、また４月はちょうど総会開催

のタイミングだったこともあり、トータルで１１０件ほどアンケートを配布して９２件回収できた。
　せっかくの回答を何とか生かしたいと考えたが、生涯学習課ではなく、社協でもなく、生活支援体制整備事業ならではの支援とはどういうところを目指していくべきなのかが、このアンケートからだけではなかなかピンと来なかった。このアンケートの内容は、５月の協議体に向けできるだけ速やかに聞き取りを進めようということで、比較的回答しやすい質問項目を選んだため、本当に困っていることや、つながりにくい原因が何なのかというところまでは、踏み込めていないように思う。
　もうちょっと材料が欲しいと思い、内閣府が毎年行っている「高齢社会対策に関する調査」の中から、令和元年の「高齢者の経済生活に関する調査」、令和３年の「高齢者の日常生活・地域社会への参加に関する調査」、令和４年の「高齢者の健康に関する調査」を通し読みした。するとどの調査においても、結婚歴がない、または死別などで配偶者がいない方、健康に不安がある方、経済的に不安がある方ほど、地域活動への参加や参加意欲が低いことが報告されている。
　また各報告の巻末に調査に参加した先生方の解説が掲載されているが、令和元年の「高齢者の経済生活に関する調査」に参加した埼玉大学教育学部の重川先生によると、高齢期の経済生活に対する不安の高どまりが続いており、１９９０年代初め頃には老後の経済生活に不安を抱く割合は６０％くらいだったのに、２０００年頃には８０％まで上昇。それがさらに８０％から９０％程度まで推移するようになってきているということで、つまり地域活動に参加しないことには、経済的な要因も大きいのではないかと考えられる。
　公益財団法人ダイヤ高齢社会研究財団の澤岡先生は、男性は有償無償にかかわらずプロダクティブな活動、つまり自分の楽しみというより他人を助けるような活動のほうが生きがいにつながりやすく、そのため地域活動に参加するきっかけとして、有償の地域活動や就労よりの活動に誘うほうが有効だと指摘している。これを踏まえ、セカンドキャリアを検討し始める時期から地域ともつながっていくよう促すことを提案している。
　前回の協議体で吉田委員が提案された協同組合の活動や、きた包括より提案した町会レベルでの福祉ネットワークづくりが生活支援体制整備事業にふさわしいと思うが、そうしたものはどうしても複数年度にまたがるため、腰を据えての取組が必要になってしまう。これまでのように、単年度である程度成果を出していくことを考えた場合には、生涯学習課がやっているような、自分の好きなことで地域とつながるということではなくて、人の役に立つことで地域とつながる、安心してできるボランティア活動の紹介ということに焦点をあて、地域のボランティア募集情報、ボランティアを始めた方の体験談といったものを冊子にまとめ、配布するのはどうかと考える。
（高良委員長）
　やはり経済的要因はかなり大きいと思われる。ただ、それは多分女性も同じで経済的に厳しい状況の中では、地域活動に参加しない１つの大きな要因になるだろうと考える。まさに今、朝日新聞で「定年クライシス」の連続した記事が載っているがもうまさにそのとおりだと思う。男性の方はどちらかというと自分がやってきた仕事に自負がある、自分は社会に貢献するという思いを満たすような活動が必要であるとか、また先ほどの報告の中で内容が難しい講座のほうが男性が好んで行くという話があるが、そういったことを踏まえて今後どうしていくのか考えていかなければいけないと思う。

次に資料６に移っていく。前回の協議体で高齢男性の生活意識へのアプローチということで話合い、これについて今後また検討してくことになったが。現状としてこの資料にまとめてあるように妻がいないとか、もしくは高齢になって、知識不足、ＡＤＬの低下等により日常生活に支障を来す事例が生じているのは、やはり実際に外出しないで地域や社会とのつながりがない状況になりやすいのではないかと考えられる。

高齢男性の無関心層の方々へ働きかけつつ、その周りの妻や娘への働きかけも必要ではないかという話合いがなされた。一方で、働きかけをどのようにしていくかということだが、そもそも高齢男性に合ったような居場所が少ないのではないかという課題認識もしたと思う。

そういう中で既にある社会資源が地域にはいろいろあり、既にどのような社会資源があるのかという現状をまとめてあるが、こういう社会資源をいかに高齢男性の方々につなげていくのかという情報提供や周知の方法について、そしてどのような働きかけをしながら情報提供していくのかを検討することがまず第１点目になる。その際に先ほど御紹介いただいたホームタウンプロジェクトにもあったように、誰をターゲットにして、どういうふうに進めていくのかを明らかにしていかなければいけない。高齢男性へのアンケート調査結果から考えていくと、７０代ぐらいから７５歳辺りのところを見定めていくのがいいのではないかと思われる。一方で、調査結果を踏まえて現役世代への働きかけとして、退職をした後の地域につながっていくイメージを少しでも早めに作ってもらう対応も必要であると思う。その対応をどのように進めていくのかを考えていきたい。さらに、先ほど課題の３番で挙げたように高齢男性が活動できる社会資源が実際にないのであれば、それを増やしていく必要も出てくると思われる。

本来、両方並行してやっていくべきことだと思うが、なかなか難しいところもあると思うので、まずは今ある社会資源等を、ボランティア情報ブックのようにして、高齢男性の方が興味を持つような情報を集めてき、それを本当に必要な人たちにどう伝えていくのかを検討することから始めていってはどうかと思うがいかがか。

正直なところ協議体は別に単年度で明確に成果が見えなくてもいいと思う。例えば情報を届けてアプローチをしつつ、社会資源の開発も併せて行うとか、もちろん社会資源の開発をするのは簡単にできることではないので、随分な時間をかけながら進めていく可能性はあるが、継続審議をしていきながら進めていくこともありではないかと思う。

次の第２回の協議体までにやっていただくことの合意形成をしていきたいと思う。まずは既にある社会資源をどのように情報として伝えていくのかについて、主な対応として今年度作成する応援ブックに男性の居場所としての活動内容を表示する。これは既に把握されていることを活用できることになり、すぐにできると思われる。

資料６の想定される協議事項１の⑴⑵議題に関して検討したということでよろしいか。次にどんな社会資源があり、またどういう形でその社会資源を把握していくことができるのかについて、コーディネーターの皆様、何か考えはあるか。それとも、もう既に自分の圏域では分かっている状況なのか。別に男性のみでなくてもいいと思うが、アンケート結果や先ほど御紹介いただいた知見を考えた際に、高齢男性が興味を持つであろうと考えられるような活動場所や居場所について大体把握しているという状況でよろしいか。

（松村委員）

コロナ後の入職のためよく把握していない。このところ施設でのボランティアの活

動再開の動きが目に付くようになった。これから圏域内でのボランティア再開の動きや、新たなボランティア募集の動きを収集したいと考えている。
（高良委員長）
　確かにボランティアに関してはどういう募集があるかについて、日々動いていると思われる。
（松村委員）
　現在、応援ブックにはボランティアの項目はない。
（高良委員長）
　ボランティアはどんな感じか。例えば高齢男性でもきるようなものなのか。
（石塚副委員長）
　一応ボランティアグループだったり、いわゆる市民活動団体に関する把握ということでは、社会福祉協議会で市民協働支援センター準備室とボランティアセンターで、毎年更新を続けているので把握はしている。要するに情報をいかに有効に活用できるかがまだ十分ではないと思われる。それがちゃんとボランティアをしたい本人に結びつくような情報提供の仕方が出来ていないのだと思われる。情報が全くないわけではないが、それをどう活用していくかだと考える。
（高良委員長）
　基本的に社会資源の男性が興味を持つであろう活動等の情報はある程度あるという前提として話を進めさせていただくが、活動していない高齢男性にその情報を届けるにはどのようにすればいいかについて意見をいただきたい。
いかがか。
（吉田委員）
　既存の情報をいかに高齢男性の方たちに分かりやすく伝えるかが必要だと思っている。ちょうど今年度は地域とつながる応援ブックの地域の活動、通いの場等の編集、情報更新時期である。我々は把握しているがこれを手に取って見る人はには分からない部分としては男女比の表示がないため、表示することで男性がいるんだなと分かり、行ってみようかなと思ってつながるようになると考える。まず簡単にできることとして、男女比や会員数何名で男性・女性何名何名というような感じで表示することによって、応援ブックでも男性が活躍している場所を把握できると考える。日頃の活動、我々の業務の中でもすぐできることとして、提案させていただく。
（高良委員長）
　濱名委員、活動団体の会員数と男女比について応援ブックのような情報冊子に載せたい場合は各団体として把握しているものなのか。
（濱名委員）
　私が活動しているところはすぐ分かる。さくら体操をやっているが、男性はすごく少ない。自治会でも班長として出てくるのは女性が圧倒的に多いが、男性はシングルの人がいるのでたまに出てくる。また、自治会に出てこられる方に活動へ参加してもらえるようになるべく声かけをするようにしている。出てこない方はどんなに声をかけても出てこようとはしない。そこは無理やり引っ張り出すわけにはいかないので、声をかけるぐらいが限界なのかなと思う。
（高良委員長）
　そこは無理やりではなく、本人がちょっと出てもいいかなと思えるようにすることが難しいところだと思われる。
　応援ブックでそういった情報提供することによって、ここには男性参加者がいるん

なら自分も行ってみようかなと考える可能性あるので、まず１つすぐできることとしてはいい意見だと思う。
　では、今回情報を更新する際には、会員数や男女比の情報も盛り込むという形でお願いしたい。
　ほかの意見はいかがか。
　どういうものなら伝わるか、アンケートの調査結果だ紙ベースが多いと思われる。公民館、掲示板とか回覧板。掲示板は外に出ないとあまり見ないと思われるが、回覧板なら見る。市報は読む。男性の方は市報を特に読むのか。アンケート調査結果の回答としてこれだけ多く出ているということは、とりあえず目を通していると思われる。そういうことも踏まえながらどういう情報の提供をすればいいか、結局情報をどう整理するかだと思う。
　また、ボランティアをしたいと思ったときにどこに連絡すればいいのかすぐに分かるような状態になっていれば、自分から探せるようになる。あらゆる情報をとどんと渡しても、結局そこで混乱したり、何が何だか分からなくなる。
　少しでも探したい情報があれば、キーワード検索してどこにあるのだろうと探してここに行こうかと考えるが、いかに高齢の方が自分でスムーズに情報収集できるのか、また、どこでどういう方法だったら情報提供できるのか考える必要がある。
　活動団体に来る方であれば何をしたいのかの話を聞く機会はいくらでもあるのだが、自宅にいる方にそれをするとなると、間接的に回覧板や市報のようなもので情報提供することになると思われる。その際に紙面で興味関心がある人に必要な情報提供することは出来るが、分かりやすく案内するのはなかなか難しい。
（鈴木委員）
　うちの方の老人クラブは会員数が少なくなってきていて、会長が一軒一軒知っている方のお宅を回って、入りませんかと声をかけている。会長も８０歳を過ぎているが、直接自宅訪問する方法は一番強いと思う。直接来られると老人クラブに入るのを考えようかなとなるので。
（高良委員長）
　本来はそれが一番、全部アウトリーチしていくのがすごくいいことだと思うが、なかなか難しい。でも、老人クラブがやっている活動としてはすばらしいことだと思うし、我々としてもそうされていることを知っておくことは必要だと思う。お知り合いだからこそ出来るのだと思う。
（鈴木委員）
　知っている間柄で、やはり御近所で話すのが一番だと思う。
（高良委員長）
　間接的に、全戸を訪問するのは難しいが、いろいろ声をかけてくれるような鍵になる方々に、高齢男性への働きかけをする際にお手伝いいただくのはどうか。いろいろな高齢男性の活動の場所があるということを間接的に伝えるのはどうか。その方たちに応援ブックのような情報紙を渡し、その方々の会話の中でちょっと参加してみないかと伝えてもらえるのではないかと思う。その場合はそれなりの資料などをつくる必要があると思うが、それも１つ案としてある気がする。
（石塚副委員長）
　現在社協では、ひきこもりがちな方々を集めるということで居場所プロジェクトを実施している。ひきこもりがちな方なので、なかなか地域に出てこない、出たくても出てこられない方々である。そういったところで我々も取りあえず来てみないと声を

かけて、同じようにひきこもりがちな方々を集めて、いろいろな言いたいことを言ってもいい場所だと誘って来てもらっている。出てこられない方は結構パワーダウンしている方が多い。話をする集まりの中で、熱量が多く元気よく活動している方に比べ、熱量が比較的少ないひきこもりの方が参加するのは確かに厳しいと思うことがある。同じくらいの熱量の低いと思われる方達を集め、それだったら自分も居てもいいかなと思えるような場を作って参加してもらっている。

パワーダウンしている同士が集まり話をしていく中で、少しずつエネルギーをためていく。またお互いの話を聞く中でこういうことだったらできるかなとか、それはいいねとなる。あとは我々のところではそういったところから農園活動につないだりしている。そういう熱量が同じくらいの方々が集まれるような状況をつくってステップアップしていくことも１つ方法としてはあると思う。

もともとパワーがあり活動的な方でただ興味が無いからやらないという人だったら、興味がある活動を見つけてそのまま活動に入っていけばいいし、パワーダウンしていてなかなか一足飛びにその中に入っていくのは難しい方の場合には、やはり段階を踏んだ支援方法を考えたほうがいいという気がする。

（高良委員長）

そう考えると理想的には男性のみの空間で、誰でもいいから何でもいいからちょっと来てもらっていいですよというような場所をつくるのはどうか。

（石塚副委員長）

例えばだけれども。

（高良委員長）

もちろん参加費も要りません。それこそお茶か何かを自由に飲めますというようにして、声をかけても何か活動しないと集まらない。そうするとやはり講座とかになるのか。でも、そうするとまたちょっと違う気がする。パワーダウンしている状態の方が難しい。

（石塚副委員長）

なかなかつながらない方々はある程度パワーダウンしている状況が考えられる。まずはそういう方達だけで集まれる場を作り、出で来てもらう。そこが第１ステップで、その先につなげようと思えば、その集まりの中で伝えたい情報を提供したり、それぞれの好みが分かれば、好みに応じた情報を提供できる。最初は参加することが大変だったら一緒に行ってあげるよとかいう形でもいいと思うし、１人ではなかなか踏み出せないところを周りが少しずつ応援する形も考えられる。もしくは既にそういう段階を経て少し活動している人がいれば、その人の話を聞いて参加していくというふうに少しずつつなげていくことも考えられる。本当に単年度で考えるのは非常に難しく生活困窮者自立支援法の部分でも、重層的体制整備事業でも、地域づくりと参加支援が大きな問題になっている。そこは目に見えない部分で時間もかかるもので、段階を経てやっていくことも必要なのだと思う。

（高良委員長）

高齢男性に特別な居場所を設けて声をかけても、自発的に来るかというと基本面倒くさいわけなので来るはずもない。そう考えていくと、やはり自分が必要とされているところが一番で、女性も同じだが、ぜひあなたに来てほしいというところをアピールしていかないといけないと思う。そうなってくると鈴木委員のお話のように本当にアウトリーチになってしまい、１人ずつ話をしてぜひ来てほしいということになってしまう。もう一個のやり方としては、前回も意見をいただいた妻や娘とか家族からア

プローチしてもらう方法がある。我々がアプローチできるのは女性のほうが多いのだけれども、そこから高齢男性に働きかけをしてもらう、それはまた検討が必要だと思う。ただ、この場合もそのための資料を準備して妻や娘に情報を伝えてもらう働きかけをしないといけない。ただ旦那さんに言ってあげてくださいねと言われても多分困ると思われる。なのでそこをどう妻や娘に伝えるかが１つ検討課題になると思われる。村越委員はその辺のことはいかがか。

（村越委員）

根本的に男の人は大勢で何かをやることが好きではないと思う。女の人でも中には性格的に嫌いな人は嫌いなので。だからあまり大勢というよりは本当に２～３人とかそのくらいから声をかけ続けるとか、そういうことしかないのかなと思う。

うちの町会は避難訓練とかそういうものであれば、みんなやはりやったほうがいいのではないかということで家族で参加するので、そこでいろいろな人と知り合うことが出来ればいいのかなとは思うが、難しいと思う。

（高良委員長）

避難訓練はすばらしいと思う。やはり誰にでも普遍的に心配事になっていて、必ず行動しようかなと思うようなものである。誰かキーマンになるような方が行って、今度出てみないかという働きかけをするのが一番いいと思う。そこを地域の方の中で何か担ってくれそうな、サポーター的な方は今回の訪問プロジェクトでもかなりいるのではないか。主体的に参加いただいた方がそうだと思うが。

（菊地原介護福祉課職員）

ワークショップに参加いただいた地域住民の方がいる。第２層コーティネーターが選りすぐって選んで声をかけてくださった方がたくさんいると思われる。

（高良委員長）

例えばそういう鍵になられている方々で、御自分の地区の避難訓練のときにはこの資料をお渡しするので、これで働きかけをしてくれませんかというようなお願いをするとか、そのレベルならできそうか。もちろんそのためにはお願いするための応援ブックのような何らかの社会資源的な情報が載った資料をつくらなければいけないと思われるが。出川委員、いかがか。

（出川委員）

男性は自分の役割がないとなかなか行動しない印象を受けている、私がお手伝いしている方は奥様のことはすごく熱心にしていたり、興味を持って勉強したりという方が多い。自分でないと駄目だという役割をもっているため、勉強に出かけたり、講座に行ったりするのをよく拝見する。今、話があった防災とか、自分でなくてはというきっかけを探せていけたらいいのかなと思った。防災だと地域にもつながるし、仲間というよりかはまず自分がここに行かないとそこが動かないみたいな役割が探せたらいいだろうと思うのだが、そこを探すのが難しいと思う。

（高良委員長）

そのとおりだと思う。防災のときに、この役割を担ってほしいとお願いする。でも、そのときだけになってしまうので、何かそこから継続してやってもらうような方法はないか。吉田委員、お願いしたい。

（吉田氏）

例えば防災訓練のその際に、地域の防災時の情報格差のある人たちに防災時の情報等が随時スマホの活用を通して届けられるように、スマホサポーターとして救っていただける方になってもらえないかなどの話をもちかけ、それに関連したチラシを持参

してスマホサポーターなどのボランティアの説明をしたり、ボランティアに必要な講座を受講してもらうなど、その他の講座等にもつなげてしまえばと思う。
（高良委員長）
今あること、活動していること、もしくは今ある社会資源でどういうふうにつなげていきながら、形を少しずつ変えながらやっていくのはすごくいい考え方だと思う。すぐにできないか。
（菊地原介護福祉課職員）
男性の居場所という話で、私たちがイメージする居場所は月１回なり週１回なりの活動する既存の居場所、そういう男性が集まる居場所をつくろうとか、つくらなければいけないという認識でいると思うが、このあいだ都老研で出している情報紙の中で、通いの場の定義という話にタイプ１、タイプ２、タイプゼロがあり、タイプゼロはそういうところに行かない人たちで、行かない人たちはどうやっても行かないという話は前回も出ている話である。でもその方たちはどこにも行かないといっても家から１歩も出ないわけではなく、銭湯や喫茶店、カラオケや床屋にも行くこともあると思われる。男性の居場所は定期的にみんなが集まる場所だけではいないと思う。
どこでどうやって情報を伝えられるかという働きかける場所について方向転換をすればいいのかなと思う。男性が行きやすい場所に情報を提供できるようにして、男性の目に入る情報として手に取ってもらうことで、興味関心を持ってもらえる方法もあると考えると、通いの場という考え方にとらわれ過ぎてはいないかなと感じた。
（高良委員長）
結局いかに自分で必要なときに誰かしらとつながっている状態をつくれるかだと思う。そこからまたいろいろな人につながる可能性があるので、そういう機会をつくっていくことが大切なのだと思う。別に男性の居場所はここにあり、週何回集まる形をつくる必要はなく、むしろ広がっていくつながりの中から、新たにやりたいと思うことでつながった人たちでまた集まり活動するのであればいいことだし、そういう広がりを持たせるためのものになるのだと思う。いかにこちらがどういう情報を発信できるかで、伝えたい情報のうち１つでもヒットすればいい。そこから動こうかなと、動かなくてもいざというときにつながってここに連絡すればいいのだというのが分かっているだけでもいい。自分が孤立してしまって動きが取れない状況にならないようにしていくことが一番大切なのではないかという気がする。応援ブックに男女比を入れたり、防災に関連したＩＴ関係としてスマホの活用ができるようなものを考えていくとか、そういう男性の方がやりがいを持てるような役割創出の仕掛けをどれだけつくっていくかを継続して考えていきたいと思う。
本日はこれで終わりとしたいが、また次回第２回協議体までに今日の議論を踏まえて連絡会で多少検討いただきたい。

３　その他
次回協議体の開催予定
（事務局）
次回協議体は令和５年９月２１日木曜日午後２時からで、会場は本日と同じ予定。

４　閉会